大人が絵本を
第14回　情緒を

司書・読書アドバイザー　安藤　宣子※
小児歯科医師　濱野　良彦※※
※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）
※※ 医療法人元気が湧く　理事ファウンダー

小学生だってパパ・ママと絵本を読みあいたい

私たちのビブリオキッズで、日々、起きている親と子の間の情緒について、「ホッコリ体験談」をご紹介します。

ビブリオキッズには来館すると、狭い通路を通りクルリと回って広がる館内の壁一面に絵本がいっぱいあります。そして、驚きの「仕掛け」が準備されているのです。高い書架の最下段一画に設けた季節の展示コーナーは、子どもたちの興味・好奇心をくすぐる四季折々に合わせた展示枠として、赤ちゃんでも気軽に触れられる書棚になっています。定期的に絵本が入れ替わるこのコーナーは、子どもたちにも季節の変化を感じてもらえるように工夫しています。ですから、子どもたちはその時々に気に入った絵本を選んで、お父様お母様のところへ「読んで～！」と持っていきます。

まだ文字の読めない子どもと保護者の読みあいは日常的で当たり前の光景なのですが、時折目にする小学生と保護者が読みあう姿は、私たちの心がホッコリする瞬間です。「バムとケロ」シリーズのひとり読みを楽しんでいた児童が、次に選んだ「バーバパパ」をお母様のところへ「読んでぇ。」と持っていき、ひとつのクッションに親子並んで腰かけると、親子の読みあいが始まります。

『おばけのバーバパパ』
アネット・チゾン，
タラス・テイラー 作
山下明生 訳
（偕成社）

大好きなお母さんの温かい声の語りで、子どもたちがお話の世界に入り込んでいる光景は、とても和やかな時間が過ぎているのがわかる瞬間です。そして、その時間を味わった児童は、次の絵本の世界もお母様と一緒に過ごそうと、「次、これ！」と読みあいを続ける傾向にあります。絵本を仲介として、子どもと親との情緒の一体感がそこに存在するのです。私たちには見えるのです。分かるのです。その空気が。

この時間、この体験こそが子どもの情緒を穏やかなものにしてくれているのです。

小学生が大人に絵本を読んでもらうということ

文字が読めるようになると、「自分で読めるのだから」と読みあいをしなくなる親子もいます。松居直氏は「絵本は子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んでやる本」[1]と唱え続けています。「親と子が共に居て、そのひとときの時間と空間のなかに、絵本という歓びの世界があり、読み手と聴き手とがその言葉の歓びをわかちあい、共有すること」[1]に意味があると断言しています。大好きな大人の声で読んでもらうことで、同じ時間を過ごしながら感情を共有し、愛と情を感じて、これらが情緒を安定させてくれるのです。

ところが、人は文字が読めるようになると、自然に絵ではなく文字を追うようになってしまい、絵を見る楽しさから文字を理解する楽しさへ成長するのですが、だからこそ、大人に読んでもらい、安心できる声を聴きながら美しい絵を見て、物語を想像していくということは、心の成長にかけがえのない行きつ戻りつ、繰り返しの体験となるのです。

手にするときは！
穏やかにする絵本

企画　濱野　良彦
構成　木須　信生※※※
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ（福岡市）

親と子と、物語と

今年、小学校に入学したＡちゃんは、幼稚園までは必ずお母様と一緒に来館していました。一年生になったある日、「お母さんが一人で行っていいって言った」と誇らしげに、初めて一人で来館し、読書を楽しみました。そんなＡちゃんが、夏休みになってお母様と二人で来館し、親子で読みあいを楽しんでいました。

誰もが知っている『ヘンゼルとグレーテル』（平凡社刊）を読みあっていたときのことです。暮らしが貧しくて継母の指示で、２人の子どもが暗い森の奥に置き去りにされるシーンで、お母様は絵本を読みながら左隣に座っているＡちゃんを左手で、ぎゅーっと抱きしめたのです。そのまま、お話は続けられています。でも、２人の距離は読み始めたときよりも、ギュッギュッと縮まり、後ろから見ていると、寄りかかり合うように互いに支え合うように座っているではありませんか。見事に一体化しているのです。次に、森から自力で家に戻ってくるヘンゼルとグレーテルを、さらに森の奥深い暗闇に置き去りにするシーンでは、お母様は物語を読みながら、Ａちゃんの左腕を肩から肘にかけて何度もさすっているのです。魔女にかまどに入れられそうになる、あの強烈なシーンも同じです。やがて、ハッピーエンドが訪れ、物語は終わります。

『ヘンゼルとグレーテル』
カトリーン・ブラント 絵
藤本朝巳 訳
（平凡社）

この日、Ａちゃんは怖い物語世界に入りこみましたが、隣でお母様に優しく抱きしめられ、守られているという安心感を持つことで乗り越えることができた冒険だったに違いありません。物語世界は怖くても、お母様の愛情と支えをたっぷり受けて成長できた冒険だったと思います。それがＡちゃんの勇気ともなり、それぞれの感情が交錯して、豊かな情緒が育まれた瞬間を映画のワンシーンのように見させていただきました。私まで幸福になれたのでした。

このケースは怖い物語を読むときに、お母様に守られている安心感で穏やかにいられたのですが、絵本のストーリーに関係なく母親のスキンシップや見守りが、子どもの情緒に影響を及ぼすのです。『しょうぼうじどうしゃ　じぶた』など多くの絵本の創作や、海外児童書の翻訳で知られる渡辺茂男氏は、「お母さんのふっくらしたふところや、お父さんのたくましい腕の中や、やさしいお爺さんやお婆さんの膝の上が、幼い子どもに何よりも大切な心の安らぎを与え、語りかける言葉こそが、子どもの知らない世界を広げ、子どもの内にやさしい心と、孤独に耐え、勇気をよみがえらせる力を育てる。」[2]と、著書『心に緑の種をまく』で表現しています。

『しょうぼうじどうしゃ　じぶた』
渡辺茂男 作
山本忠敬 絵
（福音館書店）

絵本が情緒の発達を支えるという意味合いは、この「子」と「親（祖父母）」と「物語」の３つの円を少しずつ重ねたその中心にあると思います。ちょうど、

予防歯科の「Keysの輪の理論」と同じ型になります。

子どもの精神を落ち着かせる親の声

アメリカでベストセラーとなった『読み聞かせハンドブック』(The Read－Aloud Handbook)の著者ジム・トレリースは「読み聞かせは子どもの興味、情緒的発達、想像力を刺激する」[3]とし、「人間の声は、親が子どもの精神状態を落ち着かせるための最も強力な道具である。」[3]と力説しています。親子間での絵本の読みあいこそが子どもの精神安定に影響を及ぼすということなのですが、「大人の声」の重要な効果を子どもが大きくなるに従い、私たちも含めて見逃してしまっていませんか。

3歳のときに初来館したNちゃんは、0歳の妹と週に4～5日は利用する、「ペネロペ」が大好きな女の子です。来館するようになって半年が過ぎた頃、お母様が「絵本に精神を落ち着かせる効果ってあるんですか？」と尋ねてこられました。読書療法の話をしながら会話を重ねていると、Nちゃんは半年前まで一人で両足先を重ねたまま、脚を突っ張る動作をよくやっていたのが、最近しなくなったことに気付いたと言われるのです。もっとお話を伺っていると、お父様が躾に厳しい方で食事作法や物の片づけなどで怒られることが多くて、それがNちゃんのストレスになっていて、先程の動作をしていたのではないかとお母様は受け止められているようでした。お母様なりに、Nちゃんとお父様の間でご苦労されていたようでしたが、うまい解決策を見つけられない中で、当館の会員となり、それは足しげく来館され、親子で絵本を楽しんでいました。お母様の柔らかな声で毎日のように読みあい、下のお子様よりもお母様を独占する時間が長かったことは、Nちゃんの心を穏やかにし、楽しい気分をキープさせ、情緒の安定につながったと私たちは確信しています。

今では妹が3歳になり、お母様を独占できなくなってしまいましたが、妹と交互にお母様との読みあいを楽しんでいる情緒豊かなお姉ちゃんとなりました。

『ペネロペの はる なつ あき ふゆ』
アン・ゲットマン 文
ゲオルグ・ハレンスレーベン 絵
ひかしかずこ訳
(岩崎書店)

情緒を安定させる絵本の読みあい

大脳辺縁系を「心の脳」と呼んだ泰羅雅登教授は、「健やかに育っていくためには大脳辺縁系がよい働きかけを受け、情動が豊かになることが大切」[4]と指摘し、「子どもは読み聞かせを通じて、豊かな感情、情動がわき上がっているのだろう。脳は使うことで発達する。読み聞かせは、結果として子どもの豊かな感情を養い、『心の脳』が育つために役立っているのだろう。」[4]と分析しています。絵本を読みあうということは、乳幼児期ならではのコミュニケーションの第一歩です。言葉や物事への関心、好奇心や想像力を自然と育むツールですが、何よりも泰羅教授が言われる「心の脳」を成長させ、情緒を安定させる心の栄養といえ、乳児、幼児、児童などの年齢に関係なく読みあいを続けることの大切さがわかります。

冒頭で触れた小学生との読みあいが大事なように、幼児とのそれも同様です。やっと文字を覚えたばかりのお子様に、絵本の文字を一語一語、拾い読みさせている保護者も見受けられます。文字を覚えて、すらすら読めるように練習するのも必要なことではありますが、親子の楽しい絵本の読みあいの時間には、できる限りお父様やお母様の声でお話を届けてあげてほしいと願っています。文字を拾い読みすることに一生懸命なお子様は、物語世界を想像する楽しみを得られていないことになります。お子様

ビブリオベイビー Bibli Baby

連絡先　福岡市南区大橋 3-2-1 2F
絵本と図鑑の親子ライブラリー　ビブリオキッズ
TEL 092-557-3272　URL http://bibliokids.jp
[redacted]

E-mail
安藤：bibliokids.baby1@gmail.com
濱野：hamano@genkigawaku.com
木須：nobuokisu@gmail.com

と親御様の間に絵本があるときは、ぜひとも「物事への関心、好奇心や想像力」を存分に広げさせてあげ、「心の脳」を育んでほしいと思います。

「2歳から5歳まで」

ロシアの詩人で絵本作家のチェコフスキーは、「2歳から5歳までの時期にことば（特に詩歌）を覚えておくと、驚くべき記憶力を持つ」[5]と言います。そして「子どもの知能と情緒の発達の上で大きな役割を果たし終えた5歳を過ぎると、子どもはすぐにその百分の一の記憶をとどめておくだけで力がなくなる」という、知能成長のための「子どもの精神生活の弁証法」[5]を唱えています。

この能力爆発の時期と同じくして、情緒は2歳頃までに基本的な分化をとげ、およそ5歳頃までに大人とほぼ同じ程度の情緒が分化し終わり、その人の心情の美しさや性格の基本的傾向を形造ると言われています[5]。つまり、2歳から5歳までが何よりも情操豊かな人間性を育てるうえで重要な時代であって、その根底にある「想像力」を養うツールである絵本が果たす影響力を活用しない手はないのです。そこに「物語る」大人が加わると、大人の予測を遥かに超えた子どもの精神発達に大きな力を注いでくれるのです。2歳から5歳までに豊かな情緒を育むという体験があってこそ、それ以降の絵本体験がさらに、その子どもの情緒の発達を伸びやかに導いてくれるということです。

このことを知ると、小児歯科医院での大きな役目が見えてくると思います。待合室や診療室に設置の絵本を活用して、来院される親子の精神発達の支援に携わっていきましょう。

司書の専門性とは

私たち司書は書籍全分野の全学問情報の知識を有するように求められていますが、今現在の職場は絵本しかありません。このビブリオキッズに就職した当初は、絵本だけに永く従事していると司書としての資質低下につながりはしないだろうかと考えたこともあります。

小児の歯科衛生士とこのような話をすると、同じような不安と焦りをもって仕事をしていた新人時代を思い出すと言っています。でも今は、子どもたちや保護者の方々との日々の触れ合いから得た医療以外の多くの知識を持っていることに胸を張っていると言います。それが専門職なのです。

私たちも絵本を専門とすることで日々、大きな、多くの感動ができる業務に胸を張れます。それは来館される親と子との間の、あるいは、人と人との間に絵本が介在する重要性を目で見て、耳で聞き、膚で感じているからで、幸福になれる毎日です。

ありがとうございました。

文献

1）松居直：絵本のよろこび，日本放送出版協会, 2003, pp.18-21
2）渡辺茂男：心に緑の種をまく－絵本のたのしみ，新潮社，東京, 1997, pp.36-42
3）ジム・トレリース著，亀井よし子訳：読み聞かせ―この素晴らしい世界，高文研，東京, 1987, pp.33-100
4）泰羅雅登：読み聞かせは心の脳に届く，くもん出版，東京, 2009, pp.47-61
5）コルネイ・チェコフスキー著，樹下節 訳：チェコ先生の ことばと心の育児学－“2歳から5歳まで”より，理論社, 1984, pp.349-411

絵本

1）島田ゆか：「バムとケロ」シリーズ，文渓堂，東京, 1994～2011
2）アネット・チゾン，タラス・テイラー 作，山下明生訳：おばけのバーバパパ，偕成社，東京, 1972
3）カトリーン・ブラント 絵，藤本朝巳 訳：ヘンゼルとグレーテル～グリム兄弟の童話から，平凡社，東京, 2010
4）渡辺茂男 作，山本忠敬 絵：しょうぼうじどうしゃ じぷた，福音館書店，東京, 1966
5）アン・グットマン 文，ゲオルグ・ハレンスレーベン絵，ひかしかずこ 訳：ペネロペのはる なつ あき ふゆ，岩崎書店，東京, 2009